

ピジン日本語その他資料

本資料は、文献と国語史の実態との差を示す述語形式のうち、とくに、アリマス・アルヨ言葉を中心に資料を収集し、編纂したものである。次に利便を図り目次を掲げておく。

1 アリマス・アルヨ言葉

一八六〇年代

一八七〇年代

一八八〇年代

一九〇〇年代

一九二〇年代

一九三〇年代

戦後

年代不明

田舎者言葉

その他

てよだわ

時代性をあらわすサ行イ音便・バマ行ウ音便

博士言葉

責任編集 岡島昭浩

協力 衣畑智秀 大田垣仁

覚野吾郎 鳩野恵介

1 アリマス・アルヨ言葉

一八六〇年代

エメエ・アンペール『絵で見る幕末日本図会』（茂森唯士訳、講談社学術文庫） 一八六三年 一八六四年日本に滞在。オランダ人居留地ペントンでの日本語の授業について。この例は、柏木隆雄先生（大阪大学大学院教授）のご教示による。

私の召し使いは、トオという名前の若い男の子であった。多くの日本人がそうであるように、彼は自分の正確な年齢を知らなかったが、頭の上を剃り上げていないので、彼がまだ少年時代から出ていないことは確かだった。…中略…私は、最初に、彼から日本語の授業を受けた。彼は、三つの言葉で、会話を理解するための鍵を私に与えた。彼が無意識に、このような程度にまで、哲学の方式にかなった方法を用いていることに、すべての人が驚くだろうと私は思った。事実また、すべての知的行動は、疑問と否定と肯定の、三つの最も重要な表現に帰着している。…中略…というわけで、まず疑問か

ら始めて、日本語で、アリマスカ すなわち、有りますか？
を教わり、次いで、否定のアリマセン（有りません）に移
っていき、そして肯定のアリマス 有ります に終わるわけ
である。

その後は、字引が、われわれに必要な言葉を教えてくれる。
例えば、ニッポンは 日本、または日本人、チ（ヒ）は 火、
チアは 茶、マは 馬、ミズは 水、フネは 小船または船、
キンカ（ケンカ）は 戦争等々である。…中略…

こうなると、われわれは、手真似が必要ではあるが、通訳な
しに説明することができた。例えば、かなり長い間留守した
あとで、家に戻って来た私は、トオにお茶を持って来させる
ため、「チア、アリマスカ」というと、彼は「アリマス」と
答えて、まもなくすると、お茶はもう私の前の机の上に置か
れている。私が、警報が鳴っているのを聞いて、火事ではな
いかと思い、「チイ、アリマスカ」と尋ねると、トオは、「ア
リマス」と答える。しばらくして消火されると、彼が戻って
来て「アリマセン」という快報を私に伝える。

（八五 八七ペ）

一八七〇年代

河竹黙阿弥『月宴升秘栗』（一八七二年一〇月初演）『黙阿弥
全集第十巻』 「唐人」の言葉のみを以下に抜粋。

あなた目ない、馬鹿々々々々。

此跡よろしい家あります、大さん美しい娘さんあります。皆
々それ見るあります。

あなた踊りをどるよろしい。

私利口、あなた馬鹿々々。

あなた踊るよろしい、私大さん見たい。

大さん噺し面白い。

おゝ、あります／＼。

噺するよろしい。どんちや／＼とめうかんどん、ちやんき
うらう／＼きうらんほこりん、すいらくちうちやあらりふう
らりめう、けん／＼さいはいちえすつばあ、からころ／＼ち
くりんたい、ばあばあ。はゝゝゝゝゝ、大さん可笑い、はゝ
ゝゝゝ

これ可笑くない、あなた馬鹿、はゝゝゝ。

あなた私噺し分りませんか。

分りませんよろしい、今の嘸し私寐言。

あなた馬鹿、はゝゝ。

仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』（一八七〇 七六年）（岩波文

庫・上巻 二三七 二三八ペ） 会話中の《 》は話者に関

する私（情報提供者・飯間浩明氏）の補い。弥次郎・北八・英人モテル・ざんぎりなど。

俗間横浜語と号へ、「あなた」「おはやう」「わたくし」「たいさん」「よろしい」「まはろ／＼」などいへる。こは洋人と贈答の階梯にして、内外必用の語なれば、本文中 専に用ひたり。甘口なること、推て知るべし。

《弥》通弁がなくツちやア、あなたもおはやうも、ぢき／＼も、まはろ／＼も、わからねへ。（上・七 ペ）

《弥》彼奴「モテル」は、此地の様子も知ッてゐるし、濱にゐたときも、港崎で毎晩まはろ／＼と、きめかけて、

（上・一 九ペ）
《モ》日本、おはやう。（同）

《モ》あなた、今日、まはろ／＼。どちら。私今ばん、パリトリツチ。ゴン。エーム。（一四五ペ）

《北》あなた、いつしよに、ありがたう。（同）

《弥》わたくし、まことどろぼう、ない。（一五四ペ）

《ざ》ア、、たいさん、どりんけん。君マア、重杯たまへ。（二一五ペ）

《弥》ライ、モテルさん。亜丁娘、助兵衛（すけべゑ）ありますか。（二二ペ）

《モ》むしゆめ、助べゑ、たいさんあります。（同）

《弥》あなた、わたくし、すけべゑまはろ、まはろ。（同）

《モ》よか／＼。（同）

《弥》こんべいに通次郎 北八、さらんぱア、ペケ／＼。（同）

《モ》あなた、喰事ありませんか。（同）

《弥》わたくし、空腹あります。（同）

《モ》此店、甚廉価。（同）

《弥》よろしい／＼。（同）

《弥》モシ、あなた、どろんけんありますか。わたくし、どろんけん／＼。（同）

《モ》わたくし、どりんけん、たいさん、あります。（同）

《モ》ぼんころ、ペケ／＼。あなた、どりんけん。まこと、わるい。カイロ 邏士役人、まこと、やかましいあります。

（五七ペ）

仮名垣魯文『安愚楽鍋』三編下（一八七二年、岩波文庫一九六七）

「異人」『あなた、異人、ペケありますか。わたくし、あなた、たいさんよろしい。』ト、チヨイと私の手をにぎったので、私もぽつとしてしまつてサ。「茶店女の隠食」原文旧漢字」（一〇一ペ）

岡本純『外客交際 遠西の手ぶり』（一九七三年）青山堂『明治事物起源』『横浜言葉』による（石井研堂『明治事物起源』ちくま学芸文庫）。

外国人に對話するに、其語の通ぜざらんことをいとひて、当時横浜言葉と称する　チキノ、タイサン等の語を云ふ、片語を以て説話する者あり、外国人の方にては、此詞を甚だ嫌ふ事なり　（三三四　三五ペ）

一八八〇年代

須藤南翠『新粧之佳人』（一八八七年）『日本現代文学全集三 政治小説集』講談社　第七回は、中国語による独り言。文

語で写されている。

阿弗利加人のダインスなりけり……

旦那私し貴郎叱りますない私し話し致します旦那叱るありますか私し泉さん助けて貰ひました（中略）お嬢さま願ひます私し悪い事するな御詫私し願ひます旦那何ぞ私し悪いな一日でも半日でも一遍私しお邸歸るあります、何うぞ歸ろ……願ひ……願ひ……ます……、嘘つきませんマホメット誓ひます、誓ひ……誓ひ……天罰……天罰……。

（第五回（末尾））

陳三「浮田さん何を考へます私し来ました腹立ちましたか御相談には成ますまいが外事なら話して御覧なさい。「何んな事ありすか私しお使い致しませう。……私し分るない貴下何処へ遣る返事です郵便電信伝話機幾干も有ります。……

「宜しい男なら書物を返しますネ、其の中へ手紙を入れませう屹と人が気が着ません、女ですか花簪児を進上あります薔薇の花へ紅で眞のやうに小さく書ます大丈夫向ふの人氣が付きませう何です。……

「ハ、ア夫困つたエーツとー。……

「ア、爾だノ、賣下ありますノ、……

「有りますノ、大層宜しいモウ此外有ません。……

「貴下分りますまい私し未だ言ません、鳩々鳩より外有りません私し考へました鳩宜しい、宜しい鳩。……

「私^{わたく}し考^{かんが}へました大丈夫^{だいぢやうぶよろ}宜^あしい有^ありませう御礼^{おれい}沢^{たく}山^{さん}貴^{あなた}下^{くだ}呉^{くれ}ますね工賃^{あな}下^た。……

「彼^{あれ}なり／＼浮田^{うきた}の側^{かたわ}らに飾^{かざ}りありしは全^{まった}く彼^あの旗章^{フラグ}なり然^されば何人^{なにびと}をか伴^{ともな}ひて人目^{ひとめ}稀^{まれ}なる空^{くう}中^{ちゆう}の会合^{くわいがふ}を語^{かた}らひけるよ益々^{ますます}不問^{ふもん}には措^をれまじ／＼。ト支那^{しなこ}語^ごを以^{もつ}て独語^{ひとりごち}しが

(第七回)

ピエール・ロチ「江戸の舞踏会」『秋の日本』村上菊一郎・吉氷清訳(角川文庫、一九五三)

・ソーデスカ伯爵夫人

(五三べ)

・アリマセン侯爵夫人

(五九べ)

・アリマス嬢

(六四べ)

・カラカモ嬢

(六四べ)

・クーニチワ嬢。

(六四べ)

「わたしは登場人物の誰をも傷つけないよう、ムツヒト天皇の御名以外は、すべての名前を匿名にした。」(七三べ)

一九〇〇年代

中村春雨(吉蔵)『無花果』(一九〇一年)『現代日本文学全集三四 歴史・家庭小説集』改造社による

日本人牧師と結婚して日本に来る米国女性、

「あの、私の日本語、日本人が聴くと可笑いでありますかね、思ふ事、向の人に分明りませんかね。」

「私、良君が、日本へ行ったら日本語ばかり使ふよろしいと仰やりましたから、それで可成左様してゐますが、外の日本人、解るまいか思ひましてね……」(三六三べ)

「私、良君の命令なざる通り、遣つて行かう思ふのであります。」

「料理番も、婢も、そんなもの入りません。私一人で遣るあります」

「否、私、遣るあります。父さんもその事、何時も云はれたであります。料理番なんか置かないやうにするよろしいつてね、それで私、平常、家でも庖厨の方の事、手伝うたのでありますよ。」

「あの、良君の親さんや、姉さんに、私早う逢ひ度でありますよ……私、米国人だから、嫌はれる事ありますまいかね。」(三六四べ)

「良君、私を愛してくださるのありますか。」(三七七べ)

などとしやべるなどの発話が見られる。また、乞食の少年の「何か遣つてくんねえ。今朝から飯一粒も食はねえんだから、腹が減っちゃって歩けねえんだ」「己等の父ちゃんも阿母も去年虎列刺で死んぢやったんでえ。」などもあり(三七七ペ)

一九二〇年代

岡本綺堂「蟹のお角」(半七捕物帳) 一九二〇年、『講談倶楽部』 一月号

「それ、フォト……。おお、シャシンあります」と、ヘンリーは答えた。……

「ハリソンさん、シャシン上手ありました。日本人、習いに来ました」

「その日本人はなんといいますか」と、半七は訊いた。

「シマダさん……。長崎の人あります」

「年は幾つですか」

「年、知りません。わかり人です。二十七……二十八……三十……」

だんだん訊いてみると、そのシマダという男は長崎から横浜へ来て、写真術を研究しているが、日本人に習ったのでは十分の練習が出来ないというので、何かの伝手を求めてハリソンの家へ出入りするようになった。ハリソンは商人で、もと

より専門家ではないが、写真道楽の腕自慢から、喜んでシマダにいろいろの技術を教えた。シマダも器用でよくおぼえた。その以上のことは、ヘンリーの日本語が不完全のために詳しく判らなかつた。

岡本綺堂「雪女」(一九二一年)『子供役者の死』隆文館、引用は光文社文庫『驚』。

「遠いあります」

岡本綺堂「異人の首」(半七捕物帳)(一九二一年)『週刊朝日』 一〇月号

ロイドは片言で云った。

「日本の人、嘘云うあります、わたくし堪忍しません」

「なにが嘘だ。さつきからあれほど云って聞かせるのが判らねえのか」

「判りません、判りません。あなたの云うことみな嘘です」と、ロイドは激昂したように云った。

「あの品、わたくし大切です。すぐ返してください」

宮澤賢治「山男の四月」『注文の多い料理店』(一九二四年一

二月） 初版目次に「山男の四月（一九二二年四月七日）」とあり

支那人はそのうちに、まるで小指ぐらいあるガラスのコップを二つ出して、ひとつを山男に渡しました。

「あなた、この薬のむよろしい。毒ない。決して毒ない。のむよろしい。わたしさきのむ。心配ない。わたしビールのむ、お茶のむ、毒のまない。これながいきの薬ある。のむよろしい。」支那人はもうひとりでかぶつと呑んでしまいました。

白井喬二『富士に立つ影 明治篇』『杉浦美佐緒 七』（一九二七年？）「報知新聞」時代小説文庫による

「私、ダラス先生あります」

「……ほう、おとなしい娘さんある」

『戊辰物語』（一九二八年）『東京日日新聞』、同年万里閣書房刊。岩波文庫による

口の悪い英国公使パークスが「こんな粗末な紙ではすぐに破けてしまう」と由利にいった。（中略）公使はウンとうなつて、札を力まかせに引き裂こうとしたが破れず、「これ駄目あります」と投げた。

（金子子爵談）

井筒月翁『維新俠艶録』（一九二八年・一二月）中公文庫、一九八八 井筒月翁は、解題にはないが、小野賢一郎「蕪子（一八八八 一九四三）とこのこと。」

「あれ、誰ありますか」

「家老です」

「おかしい服ありますね」

「あれは日本の礼服です」

サトーと伊藤とはこんな会話をした。（七九ページ『会話篇』）

一九三〇年代

海野十三『人造人間エフ氏』（一九三九年）青空文庫カードによる

イワノフ博士「……ましえん・マリ子ちゃん・くださーいまして・あれは人造犬あります」

中国人の張「ほんと、あるな。では、いう。わたし、あの子供にたのまれた」……「いや、あの子供、わたしにたのみました。わたし、けっしてうそいわない」

新居格編『支那在留日本人小学校綴方現地報告』（一九三九年）
第一書房

前田 均（二〇〇三）「七章 在外児童作文集に見る言語混用の実態―日本語と中国語を主にして」小島勝（編著）『在外子弟教育の研究』二一七―二四〇 玉川大学出版部による

：今回は、新居格編『支那在留日本人小学校綴方現地報告』一九三九（昭和一四）年、第一書房、本章での略称A、在満日本教育会『皇紀二千六百年記念 全満児童文集五・六学年』一九四〇（昭和一五）年―略称B、のみ確認することができた。（二一九 二二〇ペ）

：一方で、地元民の話す変な日本語を記録した作文、また、地元民相手には日本人もそのような変な日本語を使う場面を記録した作文がある。

きのふ、やさいやのにいやんが来ました。（中略）おかあさんは「きうりをかはうか。」といひながら、お外へ行きしました。にいやんは「おくさんきうりかうよろしい。」といつて、きうりをいじつてゐました。おかあさんが、きうり二本かつて「二本なんせんかね。」といひながら、うちへかへつて、お金を持つて来ました。にいやんは「二十せんです。」といひました。おかあさんは「たかいたかいしようしようまけるいいよ。」といひながらあかちゃんを、

すずみだいににおいて「しようがない。」といつて、お金をやりました。 「南満州橋頭・尋三・女」A三五二頁

地元民の「やさいやのにいやん」（野菜売りの「満人」）の話す変な日本語と、それにあわせる日本人の姿がよく描かれている。

次の作文は、「国防献金」のために古雑誌を売る話。

僕達は（中略）ボロニーヤンをさがして僕の言えまで引張つて来て僕が、「たくさんある。高く買ふよろしい」といひながら、ニーヤンに雑誌をみせると、「ハヲハヲ」といつてばかりではかつてから（中略）「トントンでこれだけ」といつて五十五銭出しました。

「奉天省営口・尋四・男」（A三七九ペ）

日本人児童が、「ボロニーヤン」―廃品回収業の「満人」―にわざと変な日本語で話しかけている。その方が通じやすいと考えてのことだろう。「ハヲハヲ」は「好々」で「はいはい」、「トントン」は「統統」で「ぜんぶ（で）」。

なかにはそんな日本語をおかしく思っている児童もいる。

インド人やしな人も、日本ごをはなす人がありますが、まんの本のやうないひ方をするので、おかしいです。

「上海・尋二・男」（A二六ペ）

「まんがの本のやうないひ方」とはうまい表現である。当時も「まんがの本」の外国人はきつとこんな日本語を話したのだろう。それは最近まで続いていた。

(二二四 二二五ペ)

戦後

豊田有恒「分身」「夢の一 分間」(一九七九)講談社文庫

外人みたいなアクセントで聞きおぼえない声だった。……

「わたし、あなたの子孫。三十世紀からきたのことある」

(九八〜九九ペ)

小松左京『ゴエモンのニッポン日記』(角川文庫、一九七四)

日本人が外国語を、得意になって、しゃべったりする時だつて、むこうの人間がきいたり読んだりすれば、テチナヤルヤル、ミナクルヨロシ式の、きわめてチンケなものになっているかも知れない。英語にした所が、うろおぼえで、アメリカ南部なまりと、スコットランドなまりと、ロンドンなまりと、中世風英語や雅文体とを、ごちゃまぜにつかっているとも

かぎらない。最近きいた話によると、アメリカの南部や、ラスベガスあたりの寄席で、その種のジャパニーズ・イングリッシュの口まねが、寄席芸人のギャグの一つになっていて、カタナモテクル、ヨクキレルアルナ、ソレノムワタシハ、シヌシヌアルヨ式の日本人英語が、お客の腹の皮をよじらせているということである。

安田敏朗『帝国日本の言語編制』(世織書房、一九九七)

この種の日本語の変化の例として、若干不適切であるが、台湾での「内地人中流家庭の夫人と、本島人野菜行商人との会話」として台湾の日本人教師が作文したものを以下に掲げて見よう。

「リーヤ(汝)チレ(此)幾ラアルカ」

「チレ。一斤十五銭アル」

「タカイタカイアルネ、マケルヨロシイヨ」

「タカイナイヨ、オッサン(奥さん)ロコモ(何処も)十五銭アルヨ、アナタ、ワタシ、ホーユー(朋友)アル、ヤスイアルヨ」

「ウソ言ヒナサイ。ドコノ野菜屋モ十二銭アルヨ、リーノモウ買ハンヨ。外ノ買フ カライランヨ」

「ホー、ホー、ヨロシ、ヨロシ、オッサン、マケルアルヨ。イクラ買フアルカ」

(川見「一九四二、三四」)

と、日本語がベースの文例が載せられている。石剛「一九九三a、b」においては、この例を引いて「満洲」の「協和語」との差（日本語ベースか中国語ベースかの違い。第三部参照）を論じているが、そもそも台湾のこの例文は川見が述べるように典型として作文されたものであって、実際に採集されたものではなく、そこに日本側のステレオタイプ視が存在しないとは言いい切れない。ことに「コレヤスリアルヨ」などという表現は「中国人の話す典型的日本語」のステレオタイプとして現在も有効であり、……（三八二ペ）

川見駒太郎「一九四二」「台湾に於て使用される国語の複雑性」『日本語』二巻三号、三二―三九頁

石剛「一九九三a」「ポスト植民地主義と日本の言語学的状況」『現代思想』二二巻七号、一九六―二〇八頁

石剛「一九九三b」『植民地支配と日本語』三元社

年代不明

『**商人独通詞**』（静嘉堂マイクロフィルム『日本英学資料集成』年代不明）

「日本詞で異人へ通ずるつかひよふ」

いねといふ事 又はわるいといふ事 ヘケ

おこるとき あたまたたく ポンコツ シンジヨウ

おまへといふ事 アナタ

かねくれといふ事 壱分シンジヨウ

おまへよろしい アナタヨロシイ

あるじを ダンナ

人の女房を カミサン

わかい女を ムスメ

仕ニ物よいを タイサンヨロシイ

よそへゆくを マロマロ

盗人を ドロボ

いつでもあいさつを ヲハヨヲ

かいは サイナラ

2 田舎者言葉

薄田泣菫『**完本茶話**』富山房百科文庫『完本茶話』、谷沢永一・浦西和彦（編） 以下、外国人による田舎者言葉の使用。

『**男装婦人**』一九一六年八月一四日

この婦人がマサチウセツツの某市へ旅をした事があつた。途中で道を迷つて甚く当惑してゐるところへ、農夫が一人通りかゝつた。(中略)男装婦人はその農夫に訊いた。「一寸お訊ねしますが、某市へはこの道を往きますか。」「あゝ、おつ魂消た。」農夫は眼をこすり／＼言つた。「俺はあ、何にも知んねえだよ。お前様のやうな女子みたいな男初めて見ただからの。」(上・一二九ペ)

「石碑と文展」一九一六年一月二五日

百姓が一人通りかゝつた。手には引いたばかりの大根を提げてゐる。欧陽詢は「一寸……」と言つて呼びとめて訊いてみた。

「この碑は誰の書だね、お前知つては居なからうな。」
「知らねえと思ふ人間に何故聞かつしやるだ。」と百姓は螳螂のやうに「弗」くれた顔をあげた。「これはあ、索靖といふ偉え方の書だつぺ。」(上・一八七)

「戸別訪問」一九一七年四月八日

ブライアン氏がミゾリイ州のある集会に招かれて出掛けた事があつた。

(中略)
聴衆のなかから農夫らしい人の好ささうな顔をした男が一

人出て来た。

「へへえ、先生様で御座らつしやりますか。」その男は叮嚀に頭を下げた。「私選挙ちふといつても此方様に投票するだが、今度もまたさせて戴くかな。」

(中略)
「先生様のお為めなら、俺い、何時だつて投票するだと、彼方からも此方からも持掛けるんで定めし先生様もお困りでがせうな。」(上・三四ペ)

「牛の価」一九一八年四月六日

ルズヴエルト氏が、ずっと以前紐育州の知事をしてゐた頃、一人の農夫爺をよく知つてゐた。

(中略)
「よい所へ御座らしたな、檀那……」爺さんは窓から巖丈な身体を乗り出すやうにして言つた。「ちよつくら檀那にお訊き申すべいが、市の新聞つてえ奴は、えら嘔吐くだね。」

(中略)
「私たつた今読むだばかりだが、ここにこんねえな話が載つとるだよ。何でもはあ、市の富豪が牝牛一匹の画に一万四千弗とか払つたつてこんだ。嘔吐くにも程があるだよ。」(中略)

「何だつて、檀那様……」農夫爺は解りの遅い知事をもどかしがるやうに声を高めた。「なんぼ広い紐育の市だつて、

まさか牛乳の絞れねえ牝牛に大枚一万四千弗もおッ投り出す馬鹿者も御座りましねえからの。」
（中・五 一ペ）

「国旗に接吻」一九一八年四月二二日

桑港には露西亞生れの労働者がたと居る。（中略）
女はきい／＼した声で突かゝつて来た。露西亞の労働者は呻くやうに言つた。

「拭いただよ。それが何うしただ。」

「お前さん、これを何と思つてるの。」

「国旗だと思つとるだよ。」

「国旗を何と思つてるの。」

「唯の布片だと思つとるだよ。」

（中・五一 ペ）

「子供の少い村」一九一八年六月二一日

フランスは宿の農夫を掴まへて訊いた。「爺さん、この村では子供は余り居ないと見えるね。」

「居ましねえだよ、孩児は。」爺さんは安煙草の脂臭い口をして言つた。

「余り生れないのかな。」

「あんまり生れねえだよ。」

「どんな割合で出来てるか知ら。」

「さうだなあ……」爺さんはじつと考へるやうな目つきをした。「どの女も一年に一人しかよう生まねえだからの。」

（中・五六三ペ）

「恋と花」一九一八年六月二五日

「旦那、一体あの梅の樹はどうして呉れるだね。」（中略）
「だつて、お前様、高い金出して、俺がの買取つたぢやねえか。」

（中略）

「預かれなら、預かりもしようがの、実が生つたら持つて往くだかね。」（中略）

「実は要らねえだつて。」百姓は眼を港つて不思議な茶道の顔を見た。

「俺実が生るから金を貰つただ。花見するだけなら、お前さんが幾度来たつて、彼是叱言いふ俺でねえだ。金は返すだよ。」
（中・五六七ペ）

「農夫の自慢」一九一八年七月七日

「かう言つたつて、眞実にはさつしやるまいがね、俺達の耕地ちふのは、素晴しく大いもんでね……」とダコタ生れの農夫は厚い唇をもぐもぐさせながら言つた。「春の初めに鋤を入れかけて、畦を真つ直に耕作を済ますのは、丁度秋の

かゝりだよ。帰り途にはそろそろもう収穫をせんならん程作物が大きくなつとるだよ。」

「そんな事もがすでせうな。」と英吉利生れの農夫は態と落つき払つて言つた。「俺が友達が一人印度に居るだが、何でもその話によると、向うでは畑を抵当に借金をしようちふんで、持地をぐるり一廻り検分して帰ると、もう借金の返済期になつとるので、いつ迄待つても金の借りやうが無えちふ事だよ。ははは……」

二人は声を揃へて笑つた。暫くすると、ダコタ生れの農夫は少し笑ひ過ぎたやうに、急に真面目な顔になつた。

「そんだら、はあ、丁度俺が娘智の持地とおつつかつたに見えるだね。」農夫は面と向ふ折には、こつぴどく面当を言はないでは置かない同じ口で、自慢さうに娘智の噂を始めた。「俺が娘智ちふのは、一週間前に結婚しただがね、その翌る朝馬車に乗つて牧場に出かけたもんだ。毎日毎晩持地のなかをとつ走つて、やつと牧場に着いた頃には、もう子供二人が生れとつただよ。」

(中・五八一ペ)

「何故食物が悪い？」一九一八年八月一三日

「でも、お前様、小麦が高くなつたのは、小麦自身が高くなつた訳ぢやござりましねえだよ。」農夫は言ひ訳がましく口を切つた。「あれはその学問の値段が入つてゐるからでござります。今時の農夫はお前様方と同じやうにいろんな事を知らなくつちやなりましねえからの。」

「学問の値段といふと。」タフト氏は腑に落ちなさうに眉を顰めた。「そんなものが何だつて小麦や馬鈴薯の値段に影響して来るんだね。」

「だつて考へて御覧じませ。」と農夫は節高な頑丈な手をタフト氏の鼻先きで振りまはした。「今の農夫は往時と違って、自分達の畑から上る物の植物学とやらの名前を知らなくつちやなりませえ。それから浮塵子や根切虫だが、そんねえな無益物の昆虫学とやらの名前も覚えなくつちやなりませえ。その上に肥料の化学的成分とやらもすつかり頭に入れておかなかつちやなりましねえのだからな。何だつてお前様、それにはみんな銭がかゝりまするだよ。」(中・六七ペ)

「結婚と天国と」一九一九年七月三日

英吉利のグラスゴウにドナルドソンといふお爺さんがあつた。老病で死にかゝつた時、枕もとに媼さんと呼んで言つた。「媼さんや、お前にはいかいお世話になつたの。俺も今度こそはいよいよお迎ひが来たと思ふから、どうせ往かんなるまいが、気の毒なのは、媼さんや、後に残つたお前の身体ぢやてのう。」

「何を言はつしやるだ、後の事忪心配せんと……」媼さんは悲しさが胸に一杯になつて来る様に思つた。「氣をのんびりと持つてゐさつしやれ、病は氣一つぢやといふ程にな。」

「気安めは言はん事ぢや。」爺さんは枯枝のやうな手を胸さ

きで揮^ふつた。

「ところで、媼^{おと}さんや、後^{あと}に残^{のこ}つたお前の身体^{からだ}ぢやがのう、一人暮^くしも辛^{くる}からうから、俺^{わし}に遠慮^{えんよ}は要^いらん事^{こと}ぢや、いゝ先があつたら片づいての、老先^{らうせん}を気楽^{きらく}に暮^くらす工夫^{くふう}をせんならんぞ。」

「滅相^{めっしょう}な、何言^{なに}はつしやるだ。」媼^{おと}さんは貞操^{ていそう}のかたい蟋蟀^{こはらぎ}のやうに悲^{かな}しさうな声^{こゑ}で泣^ないた。「今^{いま}さら他^{ほか}へ片づくなどと、そないな事^{こと}したら、俺^{わし}らあの世^よで二人御亭主^{ごていしゅ}を持つ事^{こと}になりますだ。」(中略)

「媼^{おと}さんや、いゝ人^{ひと}があるわい。お前^{まへ}も知^しつてのあのジヨン・クレメンス爺^やさんの、あの人^{ひと}がいゝわい。あれは人間^{にんげん}が親切^{しんせつ}上に、神信心^{しんしんしん}しないさうぢやから、お前^{まへ}が片づくのに詭^{あつら}へ向^むきといふものぢやて。」

「何故^{なぜ}の。」娼^{わう}さんはげんさうな顔^{かお}をした。

「考^{かん}へてみさつしやれ、俺^{わし}とお前^{まへ}があ^あの世^よでの、一緒^{いっしょ}になつて居^ゐらうと、不信心^{ふしんしん}者のクレメンス爺^やさんが天国^{てんごく}へは上^{のぼ}つて来^こまいからの。」(下・八 六ペ)

「胡桃^{くるみ}」一九二五年五月六日 黒人から白人へのセリフ。

「嘘^{うそ}はつきましねえ。その墓石^{はかいし}の下で神様^{かみさま}と悪魔^{あくま}とが、死人^{しにん}を分^わけてござるだよ。」(中略)

「わしら先^{まづ}へ帰^{かへ}るだよ。」(下・八六七ペ)

「詩人^{しにん}と百姓婆^{ひやくしやうば}さん」初出未詳 ヴアン・ダイクが、ある時

南^{みなみ}の方^{かた}へ旅行^{りょこう}した一節

「旦那^{だんな}、穢^{けが}いと言^いはつしやりますか。その筈^{はず}だての、俺^{わし}ら日がな一日^{いちにち}すばすばやつてるのだからな。」(中略)

「口^{くち}が臭^{くさ}くたつて構^{かま}はねえだ。」(中略)

「何を言^いはつしやるだ。」婆^ばさんはてんで相手^{あいて}にしないやうにせせら笑^{わら}つた。「俺^{わし}ら死ぬ^{しぬ}る時には呼吸^{こそ}を引取^{ひきと}りますでこの。」(下・九六五ペ)

「演説^{えんせつ}つかひ」初出未詳

黒ん坊^{くろんぼう}の鬚剃^{すけし}り職人^{しやくじん}は、(中略)

「旦那^{だんな}、ここんところが少し薄^{うす}いやうだが、こんなになつたのはずゐぶん前^{まへ}からのことですが。」(中略)

「雄弁^{ゆうべん}家^かだつて。そんなこと知らねえでどうするものか。わしら誰^{たれ}よりもよくあの旦那^{だんな}が演説^{えんせつ}つかひだつてえことを知^してるだよ。」(下・九九一ペ)

宮原晃一郎^{みやはらあきらいちろう}訳、ハウプトマン「織匠^{おりしやう}」第一幕(一九二三年一月

一五日)『近代劇大系⁵』(近代劇大系刊行会)

動作^{どうさく}は、千八百四十年オイレンゲビルゲのカッシュバツハ並にオイレンゲビルゲの麓^{ふもと}のベートルスワルダウ及びランゲンピールウで行^いはれる。(中略)織匠^{おりしやう}の妻^{つま}「ぢやわし旦那^{だんな}に直^{ただ}かに話^わ出来^こましねえか?」(中略)居^ゐるだ」

(二〇〇 二〇三ペ)

秦豊吉訳、ハウプトマン「馭者ヘンシエル」第一幕（一九二三年一月一五日）『近代劇大系5』（近代劇刊行会） 次の類例多数

所 独逸シュレエジエンのある温泉場の宿屋「灰いろの鵲」
ヘンシエル「それがどうだ、馬といふやつあ空気を食つて生きてゐると思ふのか、また運賃を下げやうとしてけつかる。
（略）」ヘンシエル「そのせゐで殊に旦那のお耳にやあ酷く聞えるのでござえませうつて」
（五七〇ペ）

小山内薫訳、ハウプトマン「ハンネレの昇天」第一部（一九二三年一月一五日）『近代劇大系5』（近代劇刊行会） 次の類例多数

樵夫「どうもまだ少しも暖かくならねえだね。」（略）樵夫
「（前へ進む）閣下、御免下さいまし。「かく言ひつつ、昔の軍隊生活の習慣より、額に手を当てて敬礼す」わたくしは、鍛冶屋に少し用事があつたのであります。わたくしの斧の柄に金の輪を穿めて貰ひに行つたのであります。（以下略）」（長官を前にしての話し方 引用者） （三四七 三五〇ペ）

三上 於菟吉訳 ソラ「獣人」（一九二三年一月二九日第五版）
改造社（画像） 次の類例多数

嫌疑者ガビユウシュ（「顔だちは見好げで肌は白かつた」一五一ペ）「わしがあすから出て来た時に、あの娘は十四にもならない小娘だつたでがす。あの頃わしを見るとみんな逃げやした。石さへ投げかねえ始末だつたでがす。ところがあの娘だけは森の中で逢ふたびに、わしの側へ来て話をしてくれやした。ほんたうに可愛かつたなあ。で、友達のやうになりやしただ。手を取り合つて歩きやした。あの時分は楽しかつたこんだ。大きくなるに連れてわしはあの娘を思ひはじめましただ。氣違ひのやうに逆上せましただ。あの娘もわしを好いてくれてゐましたで、追付けお話のやうな仲になつたかも知れましねえが、そのうちに奴等はあれをわしから引放して、ドアンヴィルへ遣つてしまつたでがす。するとある晩、石切り場から歸つて見ると戸口のところにあれがゐた。熱で正氣を失つてね あれは両親のところへ歸らうとはしませんでしただ。わしのところへ死にに来てくれたんでがす。ああ、あの豚め？ わしは駆けて行つてすぐに撃ち殺してやるんだつたに！」
（一五三ペ）

大関柊郎訳、セント・アーヴン「チヨン・ファীগyson」第一幕（一九二五年八月一八日）『近代劇大系9』（近代劇刊行会） 舞台はアイルランドの「ダウン州に於ける或る百姓家

の台所である」(五三五ペ)「時代は一八八 年の晩夏である」
(五三六ペ)。次の類例多数。

ジョン・ファーギュソン「(見上げずに) 大方アンドルーと
一緒に野良へいつたんだべ。」

サラ・ファーギュソン「ああ、さうだとも、おらさう願ひた
いだとも、おら達はよろこびたいだからな。おら達は本当に
随分と困つたでな。」 (五三八ペ)

チエムス・カエザー「^{とりいれ}収穫にはいいだんべいな。「ハナを初
めて見たかのやうに装ひながら」ハナさんか? おら初め来
た時は知らなかつただ。いつも御機嫌はいいんだつね?」
(五五一ペ)

『クルーティ』(左利き 引用者)・ジョン「(略) おら馬鹿
なんだから養老院へ打ち込まねければならぬいだ! おら
はおらが今より悪ければさうされたんべ! (以下略)」
(五六八 五六九ペ)

『宝塚少女歌劇脚本集』第百九号 昭和五年一月 より宇津秀
男作「フロードウェイ」 次の類例多数

第一場 田舎のある駅 新婚の夫婦見送り人共に田舎風のこ
と。新婚男「あの赤帽さん、ちよつくらニユーヨークまで参
りますだが、之れを一ツお願ひしますだ」(略) 新婚男「へ
ゝそつで御せえますだ」 新婚女「アンアンアンおらこ

んな帽子をかぶつて都さあ行くのはいやだよ、アンアンア
ンアン」(略) 新婚女「だけど都へ行つてよまたみんなに彼
んな風に笑はれるだと思ふと、俺らあ悲しくなつて悲しくな
つて、アンアンアン」 新婚男「あゝいゝいだ、ぢやあ
こうすべエ、都さあ行つたら第一番に帽子屋へ行く事にすべ
え、何うだ判つたけエ」 新婚女「(泣くのを止めて) 本當
けえ」 (二三 二四ペ)

三上 於菟吉訳 コナン・ドイル「白銀の失踪」(青空文庫カ
ード) (『世界探偵小説全集 第三巻 シャーロック・ホーム
ズの記憶』平凡社一九三 年新字新仮名にしたもの)

そこまで歩いて行くと、厩舎から一人の馬丁が飛び出して来
た。

「ここは用のない者の来るところじゃねえだよ」

「いや、ちよつとものを伺いたいのだがね」

ホームズは二本の指をチョッキのポケットへ入れていった。

「明日の朝五時に来たいと思うんだけど、サイラス・ブラ
ウンさんに会うにはちと早すぎるかね?」

「ようがしようとも。来さえすれば会えますだ。旦那はいつ
でも朝は一番に起きるだから。だが、そういえば旦那が出て
来ましたぜ。お前さまじかにきいてみなさるがいいだ。はあ
れ、とんでもねえ、お前さまからお金貰つたことが分れば、
たちまちお払い箱だあ。後で なんなら後でね」

3 その他

てよだわ

紅葉山人「流行言葉」『貴女の友』二十五号（一八八八年六月五日） 山本正秀『近代文体形成資料』に原本の影印あり。

流行といふ事万につけてあるものながら別けておかしく覚ゆるは言葉の流行なり。しかとは覚えねど今より八九年前小学校の女生徒がしたしき間の対話に一種異様な言葉づかひせり。

（梅はまだ咲かなくツテヨ）

（アラもう咲いたノヨ）

（アラもう咲いてヨ）

（桜の花はまだ咲かないンダワ）

大概かゝる言尾を用ひ物体のはなし様更に普通と異なる処なし前に一種異様の言葉と申したれど言葉は異様ならず言尾の異様なるがゆゑか全体の対話いつこも可笑く聞ゆ。五六年此かた高等なる女学校の生徒もみなこの句法を伝習し流行貴婦人の社界まで及びぬ初めのほどはいつこありしやしらず今は人も耳なれてこれを怪しと尤事はなくあどけなく

て嬉しとのたまふ紳士もありやに聞く。

「ヂヨン・ファーギュソン」(前掲)

ハナ・ファーギュソン「(疲労したやうに)」長い車は今二分前に行つたばかりよ。私、ねえ、『クルーティ』ヂヨンに「小路の先きで逢つてよ。そしたら今日は郵便は遅れるつて言つてよ。(以下略)」 (五四一ペ)

時代性をあらわすサ行イ音便・バマ行ウ音便

芥川龍之介「奉教人の死」(一九一八年九月一日)「三田文学」第九巻第九号 芥川龍之介全集 第二巻(岩波書店、一九七七) 次の類例多数

嚇しつ賺しつ、さまざまに問ひただいた。 (二六九ペ)

日頃親しう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追ひ払つたと申す事でござる。 (二七〇ペ)

芥川龍之介「きりしとほる上人伝」(一九一九年三、五月)「新小説」第二十四年第三、五号 芥川龍之介全集 第三巻 次の類例多数

なにかと親切をつくいたれば、遠近の山里でもこの山男を憎まうずものは、誰一人おりなかつた。

(三四ペ)

直木三十五『源九郎義経』(改造社版全集第一巻、一九三三年)

鎌田正清が、土の上へ膝と、手とを、突きながら

「勅諭重く候ひまして 頭殿も、再三、お嘆きなされまいたが」

(八ペ)

宮野叢子「大蛇物語」「宝石」(一九五〇年四月)『怪奇・伝奇

時代小説選集(五)』春陽文庫 志村有弘編二 による

次の類例多数

北の国の果て、四方を山に囲まれた此の里は、天高う清らに澄うで、水の浄さは類ものう、山々は木々の緑を空に靡いて紫にかすみ、雪を溶かいた水に洗われた処女らの顔は白う清う輝いて、(以下略)

(一二〇ペ)

「乳母や、いずれのお人か見えまらいたげな……」

なれど、常には、千種どのの声があれば、直ちに眼を覚まいて応うる乳母が、此の夜は、答えはおるか身動きもせいで眠り込むでいまらする。

(一二七ペ)

末松謙澄『谷間の姫百合』(一八八八年)(画像)

…夫人は遮りて(中略)「あの子は詞も変であれば拳動も不体裁であるし何う見ても紳士の夫人とは見えぬ」(第二巻第十一回。一六ペ)などあるが、「私の親の家サ英吉利の私の家へ帰へるのサ」(第十四回、五三ペ)程度で、普段は「虎と申しまして御長家を拝借して居りまする捨蔵の娘で御座ります」のような話し方。

田山花袋「日蝕の日」(一九二六年)『定本 花袋全集 第二十七巻』(臨川書店、一九九五)

「いや、まだそこにおじゃる……。今、そこを出たばかりぢや」

(七三二ペ)

片上伸訳『ドン・キホーテ』(一九二七年五月一日) 世界文学全集四 新潮社

「拙者のやうな武者修行者の義務でもござるぢや」(一九ペ)

小栗虫太郎『人外魔境』(一九四〇年)第六話「畸獣樂園」(第

一節「野武士でござる」角川文庫（一九七八）より

「やあやあ、その旅行隊にもの申す。それがしは、アルツシの“Gheleb”山地に屯する野武士の頭領“Cursa Allamayu”と申すもの。このほど、旅にでて南方へまかり越す途中、御隊をみかけ、一飯など乞う次第でござる」

この“Dergo”というのは、日本でいう一宿一飯というよ
うな意味。ところで、おそらく読者諸君は誤解されることと
思うが、私はいま、この人物に武家言葉を使わしている。し
かしそれは、エチオピアにおいては、けっして不自然ではな
い。大名あり、槍持、鉄砲、挟み箱をつらねて行列もするし、
言葉も、アクセントの入れ方が普通人とはちがう。

（二四一ぺ）

横田順彌『とっぴトッピング』（一九八八年）より「留守番電
話」光風社アルゴ文庫

「そなたが、この家の主で、おじやりまするか？」

あつけに取られている俺に、男が、どうみても正しくない
公卿ことばでいった。整った表情はにこやかで、声の調子も
おだやかだった。（中略）

「そうでござったか。いやいや、それは、まことに結構至極。
さすれば、これを買っておくんなまし」

男は、後ろ手にドアを閉めると、侍ことばとおいらんことば

をまぜこぜにしながら、アタッシェケースから取り出し、床
の上に置いた。（中略）

「そうだんねん。こうしてくんはなれ」

男が、今度は関西弁でいった。（一二一四ぺ）

博士言葉

泉鏡花「化鳥」（一九八七年四月）『新著月刊』に掲載 『鏡
花全集 卷三』（岩波書店、一九四一年） 次の類例多数

が、聞くものがなければ独で、むゝ、ふむ、といったやう
な、承知したやうなことを独言のやうでなく、聞かせるや
うにいつてる人で。母様も御存じで、彼は博士ぶりといふ
のであるとおつしやつた。（中略）「かういふものぢや、こ
れぢや、俺ぢや。（略）「えゝ、こ、細いのがないんぢやか
ら」。

（一三六 一四一ぺ）

夢野久作「超人鬚野博士」（一九三五年六 十一月）『講談雑
誌』に連載 『夢野久作全集5』（三一書房、一九六九）
次の類例多数

「成る程。どうもエライ騒ぎじゃったな。不幸ばかり重なって……」(中略)「直ぐに今から活動を開始するじゃ」

(五七ペ)

中島敦「文字禍」(一九四一年春?)「文学界」『中島敦全集 第四卷』(文治堂書店、一九六九) 次の類例多数

「書き漏らし? 冗談ではない、書かれなかつた事は、無かつた事ぢや。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かつたのぢやわい。歴史とはな、この粘土板のことぢや。」(一八五ペ)